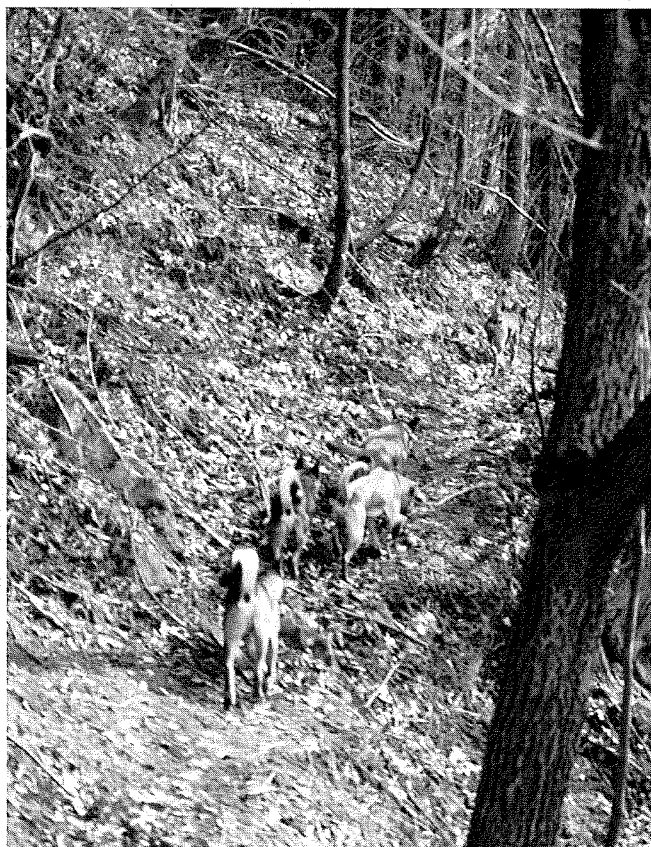


望ましい猪猟犬の育て方

—あるハンターの私見—

神奈川県

田宮 治



一重犬は猪山でも、見えるところに

◎猪猟最前線

猟期まったただ中、今日は12月10日である。初猟こそだめであったが、その後どんどん取れて絶好調である。初猟の時も犬群が1時間半も止めてくれて、勢子長が止め現場にすでによりついていた。私は…とやうとはじめての出猟に足がつり、沢の道端にどっかり座りこみ、俺の役目はこゝまで…。」さあ撃ってくださいよ」とにやにやしていた。

そこにリーダーの鈴木氏が息をきってかけつけて来た。私の顔を見て「何で!?!」と思つたらしく、「どうしました」と言うので、「もう取つたも同じだから、ロープでも持つて登ろうかと…思っていた」と、てれ笑いをする。相変わらず全犬がつき、なき声で山がゆれる様である。「鈴木さん登つていつて撃ってください」と言うのと「よしよし」と登りはじめた。

もう1時間半位になり勢子長とあと1人がよりついていると思うのに、いつまでたつても銃がならない。「おかしいなあ…!?!」その時である。「とんだぞ!?!」とさけぶ勢子長の大声である。「え!?!、うそだろう」と思いながらも腰を

上げた。突然、鈴木さんの銃がこぼれた。小沢向いにそれこそ大岩が立ちはだかつており見通しが悪い猪は当然の事、真下にいた私の前に飛んで来るはずである。黒い大きな物が大岩から飛び出た様に、横にきり雑木の藪に飛び込むところである。夢中で2発を撃ちこむが、あらいっっちゃった。

後で聞いた話であるが、止め現場は断崖の下岩がハングした寝屋場で「よく猪が寝る良い穴だ」と言う事である。横から勢子長が撃ちこもうとするのだが、首までが突いて出る時に見える状態で、前に犬群がいるので撃てなかったそうである。そのうちに「足とりのラン号」が、やっとまわりこみ後足にかみを入れたので、とび出したのだそうである。寝屋でそのまま全犬がよりつき止めた事であり、猪は急斜面をころげ落ちる様にとんで来たのであるからなんと言つてもこれは撃ちづらはずである。

しかし、丸見えの10m位との事であったのだから失敗は仕方のないとして、私も含め納得のゆくものであった。ただ「タツ」の方々に「止犬を使つての猪猟」は全

体的に良い犬群ではすぐ止めるので「まちぼうけ」が多くいつもすまない事だと思っている。その後は一度に5〜6頭もとれ、とれない日が少ない。

「順風の我が猪猟」であったが、ここに来て異変がおきている。なによりも頼りの一軍犬にである。

先犬ブル号が群馬での猟で背骨をやられ、ラン号とチヒロ号は発情である。咬みに強いサクラ号は、今猟期をあきらめて富士雄号との子作りであったが、出産予定日が11月15日で、私が出猟中であった事と寒さの為、全子犬死亡と言う残念な結果に終わってしまった。おまけにこんな事になるとはつゆ知



追犬、パロン号

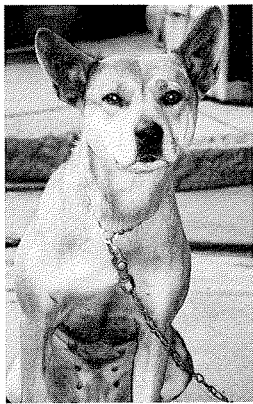


先犬、咬止犬ブル号

らずベテランのクマ号は、山梨の猟友に子犬の「教育係」として貸し出している。一番犬の富士雄号までも大猪との4時間にも及ぶ激戦で受けた傷がもとで使えないのである。

犬群で最高の力が出せるのは、言うまでもなく先犬の実力であり、先犬を中心にした「犬群のまとまり」である。その中でも大切な事は「コンビ」の存在である。たとえば「富士雄号とサクラ号」「ラン号とクマ号」「ブル号とクマ子号」の様に「2頭いればなんとかなる最高のコンビ犬」の存在なのである。そんな事は承知のほずであったのに「なんとでもなるさ」の安易な考えから、そのコンビのいずれも使えなくしてしまっているのである。

これは真にピンチであり想定外である。この様な時になんとする。こんな事がいつもつきまとい、問



「サクラ号」一流芸の牝犬は宝物

われるのが、これまた単独猟に突きつけられる常である。ふりかかると難事は、どんな事でも見事クリアしてこそ「いっぱしの単独猟人」であり、猟の「醍醐味」とか「猟談義」も語れるのだと思うのだ。

つまり猟を心から楽しみ明日にかける力を生み出してくれるのが「犬群」なのであり、「一流の止め芸」なのであるから、どんな状態の中でも言い訳のきかないまったなしの勝負なのである。それだからこそ必ずその対策をして置かなければだめなのである。

幸に一軍犬だけでも15頭位はいるのだが、どの犬を組み合わせても成果が同じではない。犬群の示すまとまりと猪に対する実力は、バックによって天と地程異なるのである。1頭の犬芸に力の差がなくても「コンビ」となったら全く

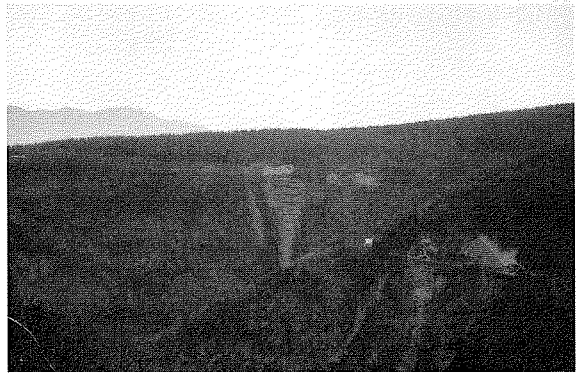
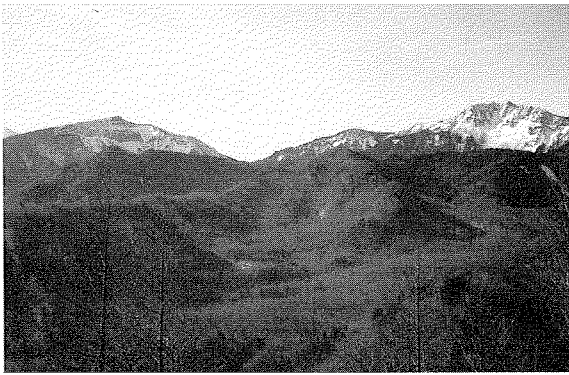


のびざかりの竜号と奈智(1歳)、俊敏で猪に強い

異なるのが犬群(1〜5頭)での猪狩りなのである。さらに先犬が「かみ一番犬」であれば猪に対する芸も自ずと強くなり、すぐ止めきるのであるが、反面負け戦の時はケガも多くなる。

当然の事、なきとからみを身上とする「クマ号の様な犬」が先犬の時は、止め時間もみじかめで止める所は「藪の中」と決っているが、まずケガはない。その代りと言つてはおかしいが、獵人に求められる止め猪の撃ち方は極上の技術が要求されるのである。ようするに犬群は「どの犬を先犬にするかで」猪猟そのものががらりと変る事であり、犬群の力も荒くなったり、同じ犬達でない様な(なき止め芸)芸をやるのである。

2頭仲良いのがコンビでも、4〜5頭の犬群がバックでもないものであつて、最高の犬の力を結集することで、極限の猟果が得られるように考えられ、つくり出されるのが、コンビでありバックなのである。獵人はそんな事を考え、現場で見た犬群の相性をみきわめた上で組合せなければならぬのである。犬群にケガのない様に、また犬達がのびのびと力を出しきれる様にする。そしてなによりも



雄大な自然の残る長野県の猟場

人間社会だけでない。異変が起きてきているのは「猪様社会？」までもである。全く考えられない事件や現象があつちこつちで報じられている。変りはてた若者の風潮や言動を、まさか真似てやっているとは思えないのであるが「現代っ子」猪様の行動は実に変わったものである。

特に今年の関東地方の(群馬・山梨)山では、どう考えても理解出来ない事が多いのである。つまり「猪猟の定説」が通用しない。追え方、マチのはり方、寝屋に至る

◎ 昨今の猪猟事情

自らが楽しめる納得の猟が出来る様に…である。



猪猟場「群馬県」

まで全ての点で猪様のとる行動は真に「現代っ子」の考え方であり、行動の様である。

今年はいつも良く獲ったどんなに良い猟場でも、山の高い所とか奥山には足あと一つなく、決まって寝ている良い所にもとんとよりつかないのがある。猪様は申し合わせた様に人間社会にとけこみ、考えられない程人家の近くで生活しているのである。そこは必ずと言って良い程、田・畑の近くであり人家のうら山なのである。人出で作られた「ごちそう」の味を始めた猪様は子供を育て、そこから遠のく事もなく、いつも人家近くで暮らしているのである。全く、のき下や庭までも掘りおこし、我が世の春を謳歌しているのである。当然の事、住人は困りきつており猟人は出番と言う事になる。

しかし、ここでも「まっつました」とうれしい事だけではなく問題もある。それは人家の近くなればこそその危険である。まず発砲についてであり、犬の人畜への被害である。この様なまたとない猟人への期待に対しては、信頼される様な成果でどうしても応えてあげたいものである。その為にはただ猪に対して強い

犬であったり、猪がとれさせずたば良い猟人であつてはならないのである。今、真に求められているのは心あたつかい真の猟人であり、猪犬もまた人畜無害であり、住人より信頼される安全で安心の本物猪犬でなくてはならないのである。そんな訳で昨今の猪猟は住人と共にあり、住人に親しまれる猪猟でなくてはならないし、なによりもそんな事がポイントとなると思うのである。

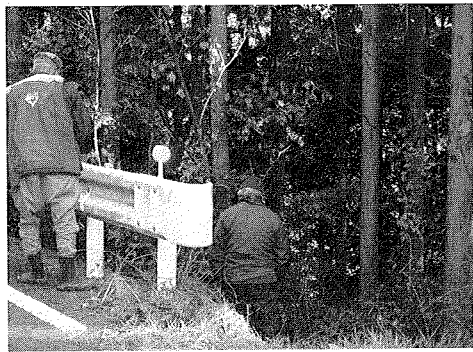
◎ すごい猪撃ちもいたものだ

「上には上」と言うけれど、今猟期一番驚いた事である。「くそ度胸」と言われるほどたいいてい事ではおどろかないが、こればかりは特別である。人間だれしも必ず年をとる。当然の事であるが、猪猟人の現役で「87歳」と聞いたらどうであろう。しかもその弟さんが「85歳」である。

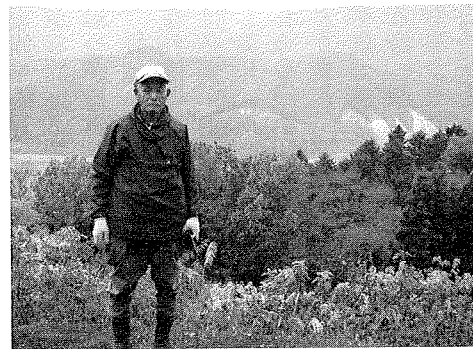
まるで猪猟の生き字引きの様なこのご兄弟と私は今猟期何回か猪猟を一緒した。そしてそのすごさを思い知らされた。まず山での動きの早さである。その姿はまさに若者の様でついでゆくのがやつとである。銃の撃ちこむ「早さと正確さ」、そして猪への止めを刺す



左から弟さん(85歳)、お兄さん(87歳)、そして私



「兄弟ゲンカよろしく?」、見きりをする
元氣な87歳と85歳の四條氏



山梨県の猪撃名人、四條氏(85歳)とバックは十枚山



解体も見事 四條氏(弟さん85歳)

「うまさ」である。私も猪については何を聞かれようと自信があった。しかしこの達人の目ではまだまだで、青くてとても頂けないものであったにちがいない。

ある朝、いつもの様に3人で猟に出た時の事である。前をゆくお兄さんの車がゆっくり止った。私の車に乗っていた弟さんが降りていった。2人で何か言い争っているのである。

近づいて見ると昨夜か、その前日かの堀りあとがあった。しかも新・旧の荒らしたあとからかなりの大物と小猪のついでにあるものであった。どうもその新・旧の判別をめぐっての争い?であった。長い時間、寝屋と狩りこみまでの決

定をめぐって本気で言い張っているのである。私はかつてクマ猟等で見た兄達の事が思い出されなつかしく、ほのぼのとした温かさを感じた。「よいものだなア」…こんなに年を重ねても同じ山で同じ楽しみを追いかけている。私は何も言わずじつとそのなりゆきを見守っていた。

私はその激論の中に今までにならぬ猪あとと寝屋場の特定、さらには教えられても決してわからない新・旧の猪の残したものの判定とひきあとについて改めて知る事になったのである。まだまだ甘かった。「上には上のある」事を思い知らされた。

2人は何ごともなかったように

私に向って「頼むよ」と言い残してお兄さんの方がマチ場へと走り去った。弟さんはニガ笑いしながら「この時だけはいつもガンコなんだよ」と言い訳をするが、とても楽しそうである。

猟場は人家より小道づたいに小沢をいっしょに登る大杉林と雑木の高い山である。人家の横を通るまでは犬群を2人でひき、それをすぎると放犬である。犬群はずいずい猪の匂いを感じしている様で、ブル号を先頭にスピードを上げ小沢に消えた。5分もたたないうちに鳴きが入る。ワウーン・ワウーン2〜3度ほえて上に向かう。間をおかず小太郎号の追い鳴きであるが方向が異なる。犬群が2分され

た様である。しかもブル号達の鳴き声が変わる。と言うより追いかけて「これは猪ではないよ」と言いつつながらも犬群の後を追った。

大杉林の中に青木が立ちこめていて、大きなカモシカのとがある。いつもこの辺にいらしくそここにフンもある。「やれやれ変な事になってしまったね。それでも「猪あとは」たしかにこの山に入っていた。小さいのと大きいのとである。

私は小太郎号のなき声は「猪だ」と確信していたので、ひとまず無線の通る大崖を目指す事にした。その早い事。この現実が85歳のなせる技である。私は後姿を見上げ

ほうぜんとする。小峯を横切りながら1時間位たっただろうか、マーカーが急になり出しブル号はじめクマ号、ウルフ号と戻って来た。やっぱり猪ではなかった事を説明、小峯の日当りで小休止である。

私は愛犬の声で猪か他のもの(シカやカモシカ)かはわかる。シカなどはあまり鳴かず、30分をめぐに帰って来るのである。反対に猪につけば鳴きは強くときれない。おまけに取るまで鳴き続けで止めきるか、追えば帰りは遅い。そんな事を説明。まわりの犬をまとめお兄さんの待っている方に追いつくむ事にしたが、猪は残っていないかった。仕方なくマチをひき上げる様に告げ、犬群と車に戻ったのである。犬群を車に乗せ無線を切る。さてさて「小太郎号だが…」と無線を最大にする。「おや?」「これは何だ」。ピー音も入らないのに「ブッ、ブッ、ブッ」「ウー、ウー」「小太郎が猪とやりあっている」「ほらね」「聞こえるでしょう」「この山の裏側はどうなっていますか。「ああ、それは…」「けさのほりあとの所だよ」「よしそこだ!!」と林道をとばし15分もしたらピー音がなり出し、登ってゆくに近づいている。

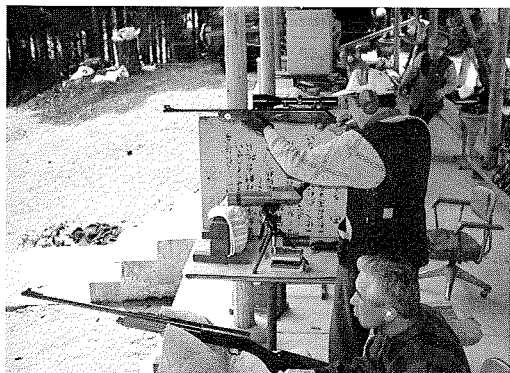
大きなカーブをまがると、無線はフルゲージになり、小太郎の生の声も入って来た。突然前方の林道の真中で小太郎が猪を咬みふせている。私は車を急停車させた。その瞬間となり座っていた「この老人(失礼)の早い事」。もう猪の所にとんでゆき、目にもとまらぬ早さで一撃を入れていた。

「なんとる早わざ!」私はこの時の行動である」と納得。やおらカメラをとり出し、パチリと負けおしみの様にとったのである。小物ではあったが、この収穫は大変なものである。「人生でまたとない実戦を学び、その上まだまだこのご兄弟を手本にもう一花さかされそう。そんな勇氣と力を頂いたのである」。

人であれ、犬であれ実戦で場数を踏み見事に咲いた「本物の芸」はすごさを感じる。ちなみに私の猟友はこのお兄さんの息子さんであるが、親とお兄さん達の猪猟をひき継いだ猪撃の達人である。その人格をしたってか、名の通った名人クラスの猟友も実に多く、その中には私の知人まで入っており助けられている。これもみな私の作った子犬が縁である。彼もまた

家族を愛し、犬をこよなくかわいがる。猪猟を心より楽しんで根っからの猟人である。

毎年春になれば桜が咲き、秋になれば猟期は来るのであるが、人は必ず1年ごとに年をとる。来年も美しい花を愛で、好きな猟を楽しめる保証はないのである。今やとりまきの狩猟界は真にそんな事を肌で感じるはずである。「生きる命の尊さ」「好きな事を存分にやる」そんな中で実感をかみしめながら残る日々を大切にやっつてゆきたいものである。そんな意味からも四條氏ご兄弟に頂いた新たな目標は、とてつもなく大きなものである。



たまには撃つ、銃も腕もサビつかない様に

狩猟界 読者の声募集!

「狩猟界」では、より充実した誌面づくりを目指すため、読者の皆様のご意見、ご要望をお待ちしております。

● 本誌に関する不満、ご希望、企画等についての提案。

● 狩猟全般に関して、日頃疑問に感じていること。

● 行政への要望、提案。

● 猟場、ゲーム、猟犬などに関する情報。

等々、どのようなことでもかまいません。編集部までお便りください。

なお、投稿原稿につきましては、文字原稿(枚数は自由)に関連写真(必要なら図表などを添付してください)。なお、原稿のテーマは自由ですが、個人への批判と思われるものは掲載できません。

〒101-0100 五反田

東京都千代田区神田錦町

1-1-21 宗保第一ビル5階

狩猟界 編集部